(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2007-185376
(P2007-185376A)
(43)公開日　平成19年7月26日(2007.7.26)

(51)Int.Cl.		F I			テーマコード（参考）
A47J 31/06	(2006.01)	A47J 31/06		A	3B001
A47G 19/22	(2006.01)	A47G 19/22		L	4B004

審査請求 未請求　請求項の数 10　ＯＬ　（全 10 頁）

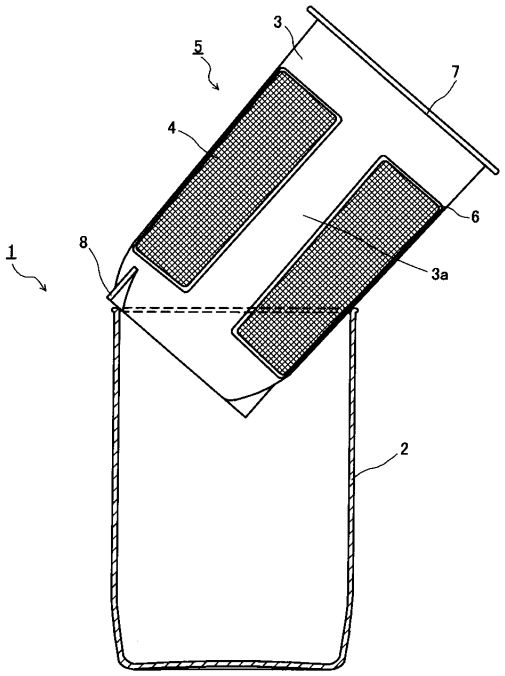
(21)出願番号　特願2006-6722(P2006-6722)
(22)出願日　平成18年1月13日(2006.1.13)

(71)出願人　000158208
旭テクノグラス株式会社
千葉県船橋市行田一丁目５０番１号
(74)代理人　100077849
弁理士　須山　佐一
(72)発明者　趙　慶姫
東京都杉並区天沼２－６－９　２Ｆ
(72)発明者　伊関　真由美
千葉県船橋市行田一丁目５０番１号　旭テクノグラス株式会社中山工場内

Ｆターム(参考)　3B001 AA02　CC03
4B004 AA02　CA16

(54)【発明の名称】こし器付き容器

(57)【要約】
【課題】特別な保持具等を使用することなく、こし器中の抽出液を簡単にかつほぼ完全に容器中に移すこし器付き容器を提供する。
【解決手段】容器本体２の開口端にこし器５を掛けたときに、こし器５を開口端で斜めに保持できるようにこし器底壁に係止部８を突設する。人が長時間こし器を容器上で保持したり、特別な保持具を使用することなく、抽出液を容易に無駄なく容器へ移すことができる。
【選択図】　図４



【特許請求の範囲】
【請求項１】
上部に開口を有する有底の筒状容器本体と、前記筒状容器本体に嵌入可能な筒状側壁と該筒状側壁の上部に設けた保持部と前記筒状側壁の下部を覆う底壁を備えたこし器とからなるこし器付き容器において、
前記こし器の筒状側壁の下部の少なくとも一部を底壁に向かって縮径するテーパー面又は湾曲面に形成するとともに、前記テーパー面又は湾曲面に、前記こし器の筒状側壁を前記筒状容器本体の縁部にもたせた状態で前記こし器の前記開口を挟んだ反対側の縁部に係止可能な係止部を設けたことを特徴とするこし器付き容器。
【請求項２】
前記こし器の筒状側壁の前記筒状容器本体の縁部にもたせる位置に、凹部を形成したことを特徴とする請求項1記載のこし器付き容器。
【請求項３】
前記凹部が、筒状側壁をめぐる環状の凹部であることを特徴とする請求項２記載のこし器付き容器。
【請求項４】
前記筒状側壁には、窓部が形成され、該窓部を覆ってこし網が固設されていることを特徴とする請求項１乃至３のいずれか１項記載のこし器付き容器。
【請求項５】
前記底壁には、窓部が形成され、該窓部を覆ってこし網が固設されていることを特徴とする請求項１乃至４のいずれか１項記載のこし器付き容器。
【請求項６】
前記底壁は、前記テーパー面又は湾曲面の一部から斜め上方に向けて傾斜して形成され、前記傾斜して形成された底壁には窓部が形成され、該窓部を覆ってこし網が固設されていることを特徴とする請求項１乃至５のいずれか１項記載のこし器付き容器。
【請求項７】
前記筒状側壁に形成された凹部には、窓部が形成され該窓部を覆ってこし網が固設されていることを特徴とする請求項２乃至６のいずれか１項記載のこし器付き容器。
【請求項８】
前記係止部は、複数の板状部材からなり、前記テーパー面又は湾曲面に、前記こし器の中心線に対して放射状に、かつそれぞれ垂直に固設されていることを特徴とする請求項１乃至７のいずれか１項記載のこし器付き容器。
【請求項９】
前記係止部は、前記こし器の周方向に回動可能とされていることを特徴とする請求項１乃至８のいずれか１項記載のこし器付き容器。
【請求項１０】
前記こし器の筒状側壁の上部に設けた保持部は、前記筒状側壁の開口端に突設された鍔又は突条であることを特徴とする請求項１乃至９のいずれか1項記載のこし器付き容器。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、だし汁、お茶、コーヒーなどを抽出する際に使用されるこし器付き容器に関する。
【背景技術】
【０００２】
従来から、例えば茶葉を用いてお茶や紅茶をいれるときには、カップの縁部に係止可能な係止部を備えたこし器が用いられている。このこし器を用いて、お茶や紅茶をいれる場合には、まずこし器内に茶葉を入れ、このこし器の係止部をカップに係止して水平に保持させ、次いで沸騰したお湯を茶葉の上から注ぎ数分間蒸らしてお茶等が抽出される（特許文献１）。

【０００３】
また、ティーポットに着脱自在に装着されるこし器を用いて、同様の方法でお茶などを抽出することも知られている（特許文献２）。
【特許文献１】特開平１１－２１６０６５号公報
【特許文献２】実公平０４－１８５１９号公報
【発明の開示】
【発明が解決しようとする課題】
【０００４】
しかし、前記のこし器等においては、お茶等を抽出した後、すぐにカップからこし器をはずして、茶葉に含まれている抽出液が出切る前に茶葉を捨てるため茶葉に含まれている濃厚な抽出液が利用されないという問題があった。
【０００５】
この問題を回避するためには、こし器をカップからはずした後、そのままカップの上に保持して、完全に抽出液が出切った後に茶葉を捨てるようにすればよいが、実際には、数分間でもこし器をカップ上に保持しているのは苦痛であり、その間他の用事ができずに時間の無駄となるためこのようなことは行ない難い。
【０００６】
また、専用のこし器保持具を用いればこのようなことも可能であるが、このような保持具を扱ったり保管したりすることは面倒であり、実用的ではない。
【０００７】
本発明は、かかる従来の課題を解決すべくなされたもので、特別な保持具等を使用することなく、こし器中の抽出液を簡単にかつほぼ完全に容器中に移すことができるこし器付き容器を提供することを目的とする。
【課題を解決するための手段】
【０００８】
上記の目的を達成するために、本発明のこし器付き容器は、上部に開口を有する有底の筒状容器本体と、該筒状容器本体に嵌入可能な筒状側壁と該筒状側壁の上部に設けた保持部と該筒状側壁の下部を覆う底壁を備えたこし器とからなるこし器付き容器において、前記こし器の筒状側壁の下部の少なくとも一部を底壁に向かって縮径するテーパー面又は湾曲面に形成するとともに、前記テーパー面又は湾曲面に、前記こし器の筒状側壁を前記筒状容器本体の縁部にもたせた状態で前記こし器の前記開口を挟んだ反対側の縁部に係止可能な係止部を設けたことを特徴とする。
【０００９】
本発明のこし器付き容器は、筒状容器本体に対する係止をより確実にするため、前記こし器の前記筒状容器本体の縁部にもたせる位置に、凹部を形成することができる。
【００１０】
前記凹部は、こし器をめぐる環状の凹部とすることができる。このように凹部を環状とした場合には、筒状容器本体へ係止する際の位置決めが容易になる。
【００１１】
前記筒状側壁は、通常、強度が大きく無害なポリプロピレンのような合成樹脂で形成されて所定の箇所には例えば矩形の窓部が形成され、ポリエステルのような合成樹脂で形成されたこし網は、この窓部を覆うようにその周囲に固定される。なお、こし網は、ネット状である必要はなく、濾過性の素材であればよく、不織布等も使用可能である。窓部は、１個に限らず任意の個数設けることができる。
【００１２】
こし器の底壁は、こし網だけで構成してもよく、筒状側壁と同様にポリプロピレンのような合成樹脂で構成し必要に応じてそこに窓部を形成しこの窓部を覆うようにこし網を固設してもよい。
【００１３】
また、本発明においては、前記底壁を、前記テーパー面又は湾曲面の一部から斜め上方

に向けて傾斜して形成し、前記傾斜して形成された底壁に窓部を形成し、この窓部を覆ってこし網を固設するようにしてもよい。

【００１４】

さらに、筒状側壁に凹部を傾斜する場合には、凹部に窓部を形成し、この窓部を覆ってこし網を固設するようにしてもよい。

【００１５】

なお、前述したテーパー面又は湾曲面に固設する、係止部は、複数の板状部材をこし器の中心線に対して放射状に、かつそれぞれ垂直に固設することができる。また、必要に応じてこの係止部を周方向に回動可能に構成することもできる。

【００１６】

また、前記こし器の筒状側壁の上部に設けた保持部は、前記筒状側壁の開口端に突設された鍔又は突条とすることができる。

【発明の効果】

【００１７】

本発明のこし器付き容器は、こし器の筒状側壁又は筒状側壁に形成した凹部を、筒状容器本体の縁部にもたせかけ、開口を挟んで反対側の縁部にこし器の係止部を係止することができるので、人が長時間こし器を容器上で保持したり、特別な保持具を使用することなく、茶葉などに付着している抽出液を容易に無駄なく容器へ移すことができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【００１８】

以下本発明の実施の形態を、図面を参照して説明する。

【実施例】

【００１９】

（実施例１）

この実施例のこし器付き容器１は、図１に示すように、ホウケイ酸ガラス製の上方が開口し下方が閉口している容器本体２と、容器本体に嵌入されるポリプロピレン製の骨組み３と、ポリエステル製のこし網４とから形成されているこし器５から構成されている。

【００２０】

こし器５の骨組み３は、図２、図３に示すように、上部が開口する円筒状に形成され、その側壁には同一形状の矩形の窓部６が等間隔で４箇所形成され、底壁にも円形の窓部６が形成されている。また、こし器５の上部開口の開口端には、外側に張り出した鍔７が形成され、側壁と底壁の接合部は、下方に縮径する湾曲面に形成され、その湾曲面には板状の係止部８が周方向に等間隔で中心軸に対して放射状に、かつそれぞれ垂直に３つ突設されている。なお、この係止部８の形状及び突設位置は、こし器５を容器本体２に挿入することができるように、こし器５の係止部８の最外側となる部分を結ぶ包絡線で形成される円の直径が容器本体２の内径のそれよりも小さくなるように取り付ける。この骨組み３の５箇所の窓部６に内面側からこし網４を貼り付け、骨組み３の外側壁面よりもこし網４面が内側になるようにされている。このようにこし網４面を外側壁面より凹ませることで、こし器５を容器本体２の縁部上で斜めに載置させたときに、こし網４面が縁部と接触しにくくなっている。

【００２１】

鍔７の外径は容器本体２の開口部の外径よりも大きくされており、こし器５を容器本体２内に挿入したときには、こし器５の鍔７が容器本体２の縁部に係止されてこし器５の全体が鍔７を介して容器本体２の縁部に保持され、こし器５の底壁と容器本体２の内底面との間に隙間が形成される。このとき、こし器５の底壁の湾曲面に形成した係止部８は容器本体２の内底面と接触していても構わない。なお、鍔７の外径が容器本体２の縁部の外径よりも大きくされているので、こし器５を容器本体２から持ち上げるときに、鍔７の外側面を鷲づかみすることができ取り扱いを容易に行なうことができる。

【００２２】

容器本体２の縁部に、このこし器５を斜めにして載置する方法としては、係止部８を縁

部に１つ掛ける方法と、２つ掛ける方法とを採ることができる。係止部８を２つ掛ける方法を採った場合には、１つ掛ける方法を採った場合よりも、こし器５を斜めに載置したときの最下部の高さ位置が高くなるため、こし器５の最下部が容器本体２内の抽出液内に浸かりにくくなる。

【００２３】

（緑茶の抽出）

上記実施例のこし器付き容器を用いて、以下のようにして緑茶の抽出を行った。

この実施例に用いたこし器付き容器の容器本体２は高さ１４０ｍｍ、径９５ｍｍ、容量７００ｍｌ用のものであり、こし器５は１３５ｍｍ、径８５ｍｍのもので、こし網４は３０メッシュのものを用いている。こし器５に突設する係止部８の形成位置は、窓部間のポリプロピレンで形成された部分（以下、支柱部分３ａと称する。）中央の延長線上の湾曲面に１つ（この係止部８は容器本体２の縁部に１箇所掛ける場合に用いる。）、この係止部８から左右に１２０°離した湾曲面に一つずつ（この係止部８は容器本体２の縁部に２箇所掛ける場合に用いる。）の計３つの係止部８を突設した。支柱部分３ａは等間隔で形成されているので、支柱部分３ａの延長線上に形成した係止部８を縁部に掛けた場合には、この係止部８の上方の支柱部分３ａの対向位置にある支柱部分３ａが容器本体２の縁部と接触するようになる。また、支柱部分３ａの延長線上から左右に等距離離した位置に係止部８を形成した場合も、対向位置にある支柱部分３ａが容器本体２の縁部と接触するようになる。

【００２４】

次に、この実施例による緑茶の抽出方法について説明する。

図１に示すように容器本体２にこし器５をセットし、このこし器５の中に茶葉を２０ｇ入れ、沸騰させたお湯を７００ｍｌ注いで３分蒸らした。その後、こし器５の鍔７の外周面を鷲づかみしてこし器５を持ち上げ、図４に示すように２つの係止部８を容器本体２の縁部に掛けるようにして斜めに載置した。その後、この状態で５分程度放置して、茶葉に付着していた緑茶を滴下させた。この放置により、緑茶が冷めた場合には、容器本体２をそのまま電子レンジ内に入れ加熱することができる。

【００２５】

この例では緑茶を抽出する例で説明したが、緑茶だけでなく、紅茶、コーヒーなどの飲料や、かつお、昆布、いりこなどを用いただし汁の抽出にも用いることができる。なお、こし網４のメッシュの大きさは、被抽出物質の大きさによって変更することができる。こし器５から容器本体２内へ被抽出物質が流入しないようにするためには、網状のものよりも不織布の方が好ましい。特に、だし汁を抽出するときには、被抽出物質が流入するとだし汁が濁る原因となるので、不織布の使用が好ましい。また、こし器５の係止部８を３つのもので説明したが、係止部８が１つ、２つの少ない場合でもよい。係止部８が１つの場合は、任意の支柱部分３a中央の延長線上、係止部８が２つの場合は隣り合う支柱部材３a中央の延長線上、又は対向する支柱部材３a中央の延長線上に形成することができる。

【００２６】

（実施例２）

この実施例は、図５に示すように、実施例２のこし器５の骨組み３の構造を変形させたこし器９を用いたものである。

この実施例のこし器付き容器は、同図に示すように、こし器９の側壁の円周方向に支柱部分３ｂを設け、この支柱部分３ｂに凹み１０を形成したものである。その他の構造や係止部８の突設位置は実施例１と同じであるので、図１と対応する部分に同一符号を付して重複する説明を省略する。

【００２７】

この円周方向の支柱部分３ｂは、図６に示すように容器本体２の縁部にこし器９を斜めに載置したときに容器本体２の縁部が支柱部分３ｂの凹み１０に嵌合する位置に配設されている。このように、この実施例では、容器本体２の縁部がこの凹み１０にはまり込むので、こし器９の斜めの状態を容易に維持させることができる。この凹み１０は、容器本体

２の縁部と接する部分のみに形成してもよいが、円周方向に形成するようにしてもよい。また、係止部８を１つ掛ける場合と２つ掛ける場合とでそれぞれの凹みを形成するようにしてもよい。

【００２８】

（実施例３）

この実施例は、実施例２のこし器９における係止部８の構成を変形させたこし器１１を用いたものである。

【００２９】

この実施例は、図７に示すように、係止部８の一つが底壁に沿って円周方向にスライド可能に構成されている。スライド可能とされた係止部８は、支柱部分３ａの延長線上の底壁に形成された係止部８である。この係止部８は、支柱部分３ａの延長線上の底壁から、隣接する係止部８の方向へ９０度スライド可能とされている。その他の構成は実施例２と同一であるので、図１と対応する部分に同一符号を付して重複する説明を省略する。

【００３０】

この実施例は、係止部８が底壁の円周方向にスライド可能であるので、２つの係止部８を容器本体２の縁部に掛ける際のこし器１１の最下端位置をさらに変化させることができる。

【００３１】

この実施例では、３つの係止部８を形成し、そのうちの１つの係止部８を９０度だけスライド可能としたが、これに限定されることなく、全ての係止部８を隣り合う係止部８までスライド可能としてもよい。また、スライド可能な場合は、係止部８は２つ形成するだけでよい。

【００３２】

（実施例４）

この実施例は、こし器の形状そのものを変えたものである。

この実施例のこし器１２は、図８に示したように、底壁３ｃを約５０度傾斜させ、底壁３ｃの最下端に１つの係止部８を形成し、この係止部８と対向位置となる側壁に上底面と下底面とを形成した切欠き３ｄを設けたものである。そして、底壁に１箇所、切欠きの形成されていない側壁に３箇所、切欠きの下底面に窓部６が形成され、この窓部６には内面側からこし網４が取り付けられている。また、底壁の最下端と切欠きの上底面と下底面との交線（この交線は弧である）の中点との距離が、容器本体２の縁部の内径よりも５ｍｍ短くなるように形成されている。また、切欠きの上底面とその上部に位置する側壁には窓部は形成されておらず、したがってこし網は配設されていない。

【００３３】

なお、こし器１２の上部開口端近傍には、外方に延びる鍔７が形成されており、こし器１２を容器本体２内に挿入したとき、この鍔７が容器本体２の縁部にもたれる状態でこし器１２が保持される。

【００３４】

この実施例も以上の部分を除いてその他の構成は他の実施例と同一であるので、図１と対応する部分に同一符号を付して重複する説明を省略する。

【００３５】

（だし汁の抽出）

上記実施例のこし器付き容器を用いて、以下のようにして鰹節からだし汁を抽出した。

なお、容器本体２は、他の実施例と同じものを用いた。

【００３６】

図９に示すように、容器本体２にこし器１２をセットし、水７００ｍｌを注いで、次に鰹節１０ｇをこし器１２内に入れた。そして、この容器を家庭用電子レンジ（７００Ｗ）内に入れ、７分間加熱した。その後、こし器１２の鍔７の外周面を鷲づかみしこし器１２を持ち上げる。

【００３７】

図１１に示すように、１つの係止部８を容器本体２の縁部に掛け、こし器１２の切欠きの上底面と容器本体２の縁部とを接触させるようにして、こし器１２を容器本体２の縁部上に斜めに保持した。このとき、こし器１２を容器本体２内に挿入していたときの底壁の最上端が容器本体２の内側壁と接触するようになる。したがって、こし器５内の鰹節に付着するなどして残存していた抽出液が、内側面を伝って落ちてゆく。このように、抽出液を伝わすことにより、抽出液の滴を落下させるより、容易に多くの抽出液を容器本体２内に落とすことができる。

【００３８】

また、このこし器１２では、切欠きの上底面とその上部に位置する側壁に窓部６を形成しない形状（非こし網）としたので、一定時間蒸らして抽出時間が終了して、こし器１２を持ち上げた際に、切欠きの上底面の内面に抽出液が付着した鰹節が残存した状態で、こし器１２を容器本体２の縁部に斜めに保持したとしても、上底面に残存した鰹節から容器本体２外に抽出液が落下する心配がない。

【００３９】

この実施例では、こし器１２の最上端が容器本体２の内側壁に接触するようにしたが、切欠きの下底面全面および最上端を内側壁に接するようにしてもよい。

【００４０】

なお、以上の実施例では、容器本体とこし器の主たる外形を円筒状としたが、多角形を有した筒状のものでもよく、さらに、多角形を有した筒状の容器本体と円筒状のこし器、多角形を有した筒状のこし器と円筒状の容器本体とを組合せたものであってもよい。

【産業上の利用可能性】

【００４１】

本発明はこし器に被抽出物（茶葉、鰹節等）を直接入れて抽出液を得るのに適した容器であるが、麦茶パック等の被抽出物が不織布等でパッケージされているものを入れても問題なく抽出液を得ることができる。また、こし器から抽出液を落として得られた飲料やだし汁を容器本体に入れた状態で、容器本体の縁部を上から覆う蓋をかぶせれば、そのままの状態で冷蔵庫等に保管することができる。

【図面の簡単な説明】

【００４２】

【図１】本発明に係るこし器を容器本体に挿入した時の断面図。

【図２】こし器を正面から見た平面図。

【図３】こし器を下方より見た平面図。

【図４】こし器の底壁に突設された２つの係止部を容器本体の縁部に掛けた時の断面図。

【図５】こし器の構造を変形させたこし器の平面図。

【図６】こし器の構造を変形させたこし器を容器本体の縁部に掛けた時の断面図。

【図７】こし器底壁に突設された係止部の構成を変形させたこし器を下方より見た平面図。

【図８】こし器そのものの形を変形させたこし器を容器本体に挿入した時の断面図。

【図９】こし器そのものの形を変形させた時の平面図。

【図１０】形状を変形させたこし器の切り欠きを正面にして見た時の平面図。

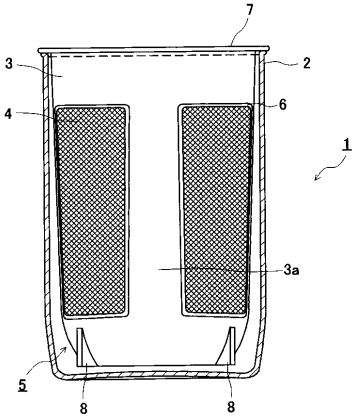
【図１１】形状を変形したこし器を容器本体の縁部に掛けた時の断面図。

【符号の説明】

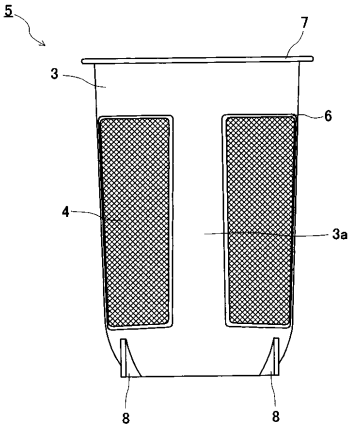
【００４３】

１……こし器付き容器、２……容器本体、３……骨組み、３ａ，３ｂ……支柱部分、４……こし網、５，９，１２……こし器、６……窓部、７……鍔、８……係止部

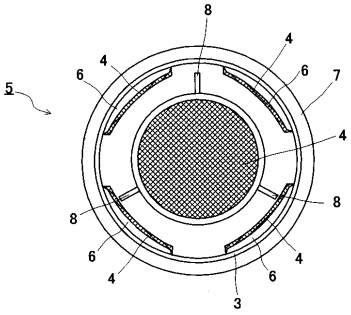
【図１】


7
3
2
4
6
1
3a
5
8
8

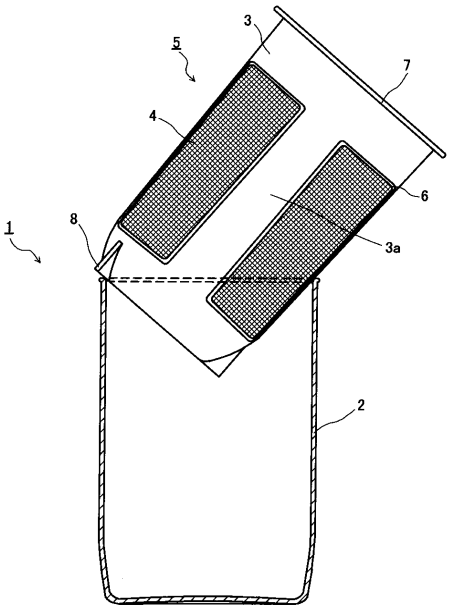
【図２】


5
7
3
6
4
3a
8
8

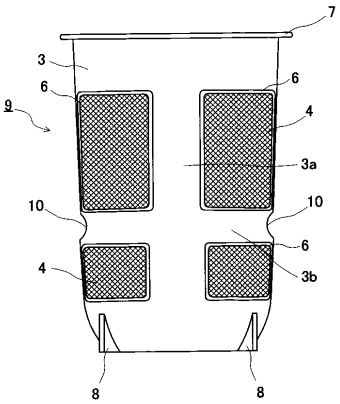
【図３】


8
4
4
6
6
7
5
4
8
8
6
4
4
6
3

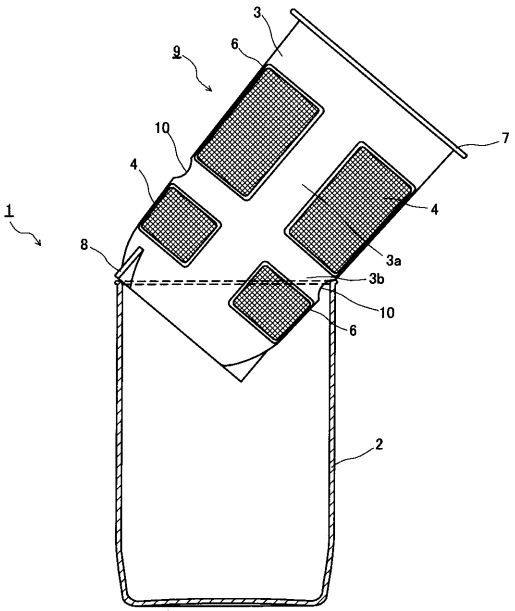
【図４】


3
5
7
4
6
1
8
3a
2

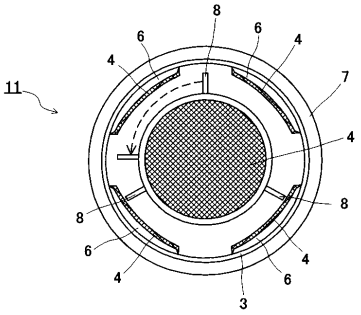
【図５】


7
3
6
6
9
4
3a
10
10
6
4
3b
8
8

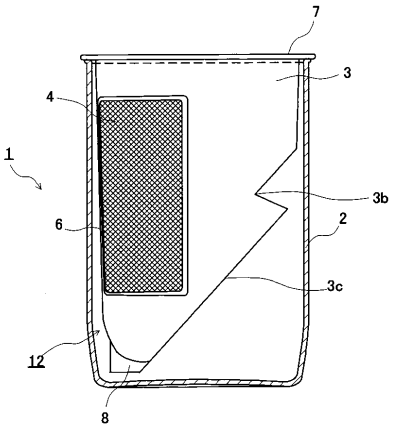
【図６】



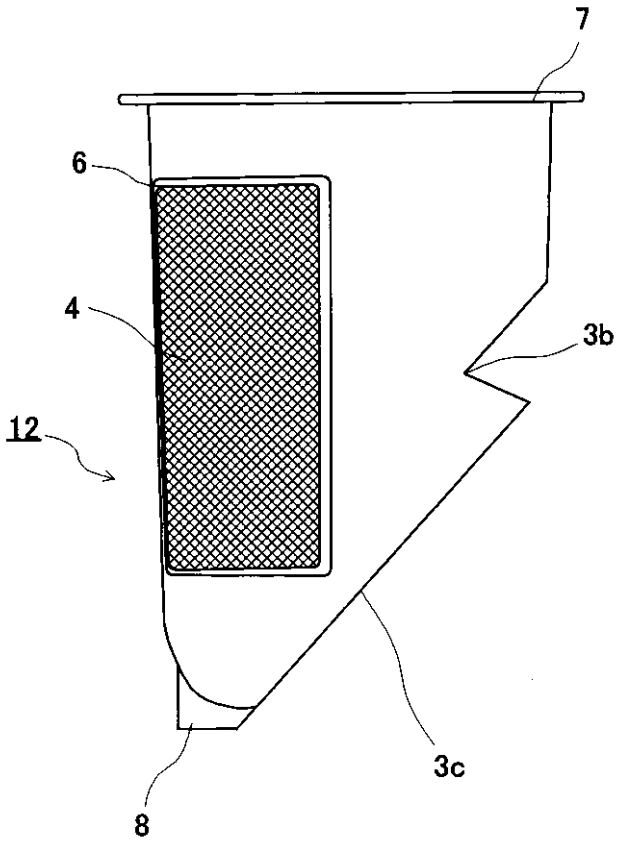
【図７】



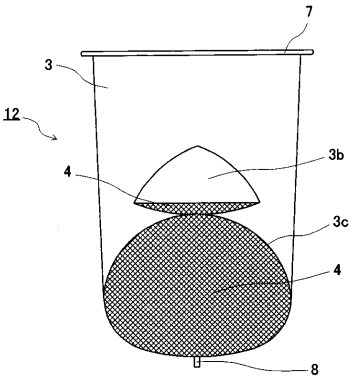
【図８】



【図９】



【図１０】



【図１１】

